

- ギリシャ悲劇『オイディプス王』研究(2014-6-5, 2014-6-6)

#### 【解説】

- ・古代ギリシャ三大悲劇詩人の一人であるソポクレスが、紀元前427年ごろに書いた戯曲。
- ・悲劇の定義は、例えば、アリストテレス『詩学』に下のようにしめされる。

「悲劇とは、一定の大きさをそなえ完結した高貴な行為、の再現(ミメーシス)であり、快い効果を与える言葉を使用し、しかも作品の部分部分によってそれぞれの媒体を別々に用い、叙述によってではなく、行為する人物たちによっておこなわれ、あわれみとおそれを通じて、そのような感情の浄化(カタルシス)を達成するものである。

ここで快い効果をもたらす言葉とは、リズムと音曲をもった言葉のことを、またそれぞれの媒体を別々に用いるというのは、作品のある部分は韻律のみによって、他の部分は韻律のみによって、他の部分はこれに反し歌曲によって仕上げることを意味する」

～アリストテレス「第六章 悲劇の定義と悲劇の構成要素について」『詩学』岩波文庫、1997年、34頁。

- ・ギリシャ悲劇の最高傑作
- ・アリストテレスがその著『詩学』で絶賛。
- ・フロイトの「エディプス・コンプレックス」の語源。

=====

#### 【あらすじ】

物語の舞台は古代ギリシャ。  
主人公のオイディプスは、現在のテーバイ国王である。  
彼は王女イオカステを妻とする、二男二女の父であった。

しかし彼の生い立ちは複雑であった。  
オイディプス自身の記憶では、彼は、コリントス国に生まれた王子であるはずだった。  
しかし、預言者によって、このままだと、コリントス王である父親を殺し、  
コリントス王女である母親と交わって子をもうけることになる宿命を知る。

自らのその恐ろしい宿命に驚いた少年期のオイディプスは、  
その宿命が実現することを避けるために、  
父母と離れるべく、コリントス国を去ったものであった。  
したがって、オイディプスにとっては、あの恐ろしい宿命は、  
自分がコリントス国にいない限り、実現するはずのないものであった。

その後、諸国放浪の末、怪獣スフィンクスを倒したことから勇者として名声を得て、  
ついに、現在のテーバイ国に国王として迎えられたという経緯をもっていた。

劇は、テーバイ国王オイディプスが、近年、国内にふりかかる謎の災いに悩む所から始まるが、  
その災いの原因が、過去にあった先代テーバイ国王の殺害事件に起因すること、  
そしてさらに、その殺人犯は、いまだ国内にいることを預言者によって知る。

そこで、オイディプスは、テーバイ国を災いから救うために、  
先の国王殺害犯を処刑すべくテーバイ国内を捜索する。

しかし、捜索が進むほどに、その殺人犯が、  
あるいは、オイディプス自身かもしれないことが、  
否定し難くなるのであった。

はたして、真犯人は誰なのか？

=====

#### 【登場人物】

(テーバイ国に由来する人)

- ・ライオス(男) = 実はオイディプスの父 (テーバイ国の先の王, ※劇中には登場しない)
- ・イオカステ(女) = 実はオイディプスの母 (テーバイ国の王女)
- ・クレオン (男) = イオカステの弟 (ライオスの死後、国をまとめる摂政)
- ・テイレシアース(男) = 予言者
- ・アンティゴネ (女) = オイディプスの娘の一人。

(コリントス国に由来する人)

- ・オイディプス (男) = 現在のテーバイ国の王。  
一方、彼自身は、生まれは別の国、コリントス国と思っている。

=====

#### 【参考】

##### ●しんたく【神託】

神が自分の判断や意志を巫女(みこ)などの仲介者、あるいは夢・占いなどによって知らせること。  
神のお告げ。託宣。「ーが下る」

(web goo辞書「神託」より)

##### ●ティーヴァ (この物語の舞台テーバイの現在)

「〔古代ギリシャにおいて〕アテナイやスパルタと覇権を争った最有力の都市国家のひとつである。  
また、多くの神話の舞台としても知られる」

( <http://ja.wikipedia.org/wiki/ティーヴァ> )

=====

#### 【使用 DVD】

「オイディプス王 アテネ公演」、蜷川幸雄(演出)、野村萬斎・麻実れい(主演)、  
発売：角川エンタテインメント、2005年。

2014年度女子美術大学サウンドデザイン演習

担当：石井拓洋 ishii05042@venus.joshibi.jp